バーナード・ショー『医師のジレンマ』における医療倫理―生体解剖論争を通して見る

松本　望希

抄録

本論は、バーナード・ショー『医師のジレンマ』(1906)における医師たちの表象に注目し、ショーが医療において生じるジレンマ、すなわち「命の価値を医師が恣意的に決めてしまうこと」に対して、そうしたジレンマを感じてしまうこと自体が誤りであると考えていることを明らかにするものである。さらにショーは、当時英国社会において、賛否両論を巻き起こしていた動物の生体解剖論争を通して、舞台空間と現実社会の問題を接合することを試みた。「悲劇」という副題をもつ本作品は、従来その皮肉めいたプロットから、ショー流の諷刺が利いた「喜劇」的なもの、すなわち悲喜劇として解釈されてきた。一方で本論では、作中で取り上げられる医療倫理の問題そのものは「悲劇」的なものであることについて検討する。

1. はじめに

本稿は、バーナード・ショー『医師のジレンマ』(*The Doctor's Dilemma*, 1906)に描かれる医師たちの表象に注目することで、作中で提示される「ジレンマ」を医療倫理という観点から検討することを目的とする。本作品は、ショーの友人である劇評家ウィリアム・アーチャーによる、「『恐怖の王』、すなわち死を含む悲劇を描くまでは優れた劇作家とは言えない」というトリビューン紙上の主張に返答する形で著されたものである[1]。本作品が「悲劇」という副題をもっているのはそのためであるが、その一方で従来の研究では、諷刺に満ちたそのプロットゆえに、しばしば「喜劇」として解釈されてきた。本論では、『医師のジレンマ』に、現実社会における医療倫理、とりわけ19世紀末より英国社会を席巻していた動物の生体解剖論争を絡ませようとしたショーの姿を明らかにすることで、本作品の、従来ではあまり注目されてこなかった悲劇性という一面を探ることを試みる。

2.『医師のジレンマ』は「喜劇」なのか

先行研究においては、前述のとおり本作品に「悲劇」という副題がつけられていることから、ジャンル上の分類を試みる議論が多く提示されてきた。マイケル・ホルロイドは、「悲劇」という副題に反し、本作品は登場人物が本物の医者よりも誇張された様子で描か

れているため、本作品をけばけばしく飾り立てられたバーレスクであると論じる[2]。バート・カルデューロは本作品を「現代悲劇」として読むべきであり、「ショーが喜劇的効果のため用いる、悲劇の表面的で技術的な要素は、ショー独自の悲劇の上部構造としても機能する」と主張する[3]。彼は、本作品の一見悲劇とも捉えることのできる要素は、実際にはショーによって喜劇へとアレンジされたものであると考える。

このように先行研究の多くは、ショーがアーチャーの主張を諧謔的に捉え、「悲劇」をいわばパロディー化した喜劇として本作品を構築したと捉えている。確かに、後述する、ショーが描く患者の「死」の場面は、一見すると非常に喜劇的であり、本作品に悲劇的な要素は不在であるように思われる。しかしながら、医療倫理という観点に着目すると、劇中で描かれる、患者の命の価値を医師が恣意的に決定するという展開は、まぎれもなく悲劇性に満ちあふれている。

その一方で喜志哲雄は、「喜劇」とは両義性があるものであるということを以下のように説明する。

> ある事件が笑えるものかどうか、喜劇的であるかどうかは、その事件そのものの性質によって決まると考えているひとがいるが、これは誤りだ。たしかに、喜劇になじみやすい事件や悲劇になじみやすい事件というものはある。男女関係のもつれや金銭をめぐる争いは喜劇の素材になりがちだし、戦争や人の死は悲劇の素材になることが多い。だが、本質において喜劇的であったり悲劇的であったりする事件というものはないのである。（中略）ただ、これが肝腎の点なのだが、深刻で悲惨な事柄が悲劇的なものとして捉えられるのは、あくまでも現実の世界での話である。劇が提示するのは、現実の事件そのものではなくて、作家によって処理を施された事件である。そして作家は、自らの作品を観客なり読者なりがどのように受容するかを念頭に置きながら、素材を処理する。その結果、同一の事件が悲劇的に感じられるものにも喜劇的に感じられるものにもなりうる。[4]

喜志は、「本質的に」悲劇的である事件というものは現実の世界だけで起こるのであり、劇的空間では、喜劇であるか悲劇であるか、明白に分割することはできないと指摘する。だが、ショーの意図は、本作品をただのエンターテイメントとして著すだけでなく、20世紀初頭における医学理論の「忠実な記録」という、現実に直結した作品として著すことにあった。そしてショーが序文の紙幅のかなりの部分を割く、動物の生体解剖に関する議論は、当時英国社会を風靡しており、動物愛護の精神と医療の発展との間で、少なからぬ「ジレンマ」を生み出していたものであった。

> Medical theories are so much a matter of fashion, and the most fertile of them are modified so rapidly by medical practice and biological research, which are international activities, that the play which furnishes the pretext for this preface is already slightly outmoded, though I believe it may be taken as a faithful record for the year (1906) in which it was begun. [5]
> 医学理論は非常に流行に根ざしたものであり、それらのうち最も想像力に富んだものは、国際的な活動である医学的実践や生物学の研究によって非常に速やかに変わっていくため、この序文のための口実としてのこの戯曲は、すでに少し時代遅れとなったものだ。だが、私はこの芝居は、それが始まった年（1906）の忠実な記録として受け取られるだろうと信じている。

医学理論の「記録」というきわめて学術的な目的を持つものとして構築された本作品全体を、改めて概観してみると、芝居それ自体はむしろ二次的なものとして展開され、序文のほうが本体であるかのようにも見えてくる。劇評家デズモンド・マッカーシーが、本作品で提示される「ジレンマ」とは、「医者は、助けられる患者の数が限られているとき、平凡で高潔な男と天才である悪者どちらを救うべきか」という問題であると指摘するように[6]、劇中描かれるのは道徳的な問題であり、それ自体はシリアスな問いかけである。そうした本質的な問いを、ショーは一見喜劇であるかのように「処理」しているものの、現実であろうと舞台上であろうと、そうしたジレンマは悲劇には違いないということを、ショーは観客や読み手に問題提起している。本作品は、現実社会の医療倫理の問題と舞台空間を接合する、ある種の「悲喜劇」なのである[7]。

3. 堕落した医師たち

本作品の、医師の恣意的な選択により命の価値が決められてしまうというプロットだけを見ると、それは十分に悲劇的なものである。だがショーは、リジョンら医師たちを、患者の命を救う権威に満ちた存在ではなく、自らの名声や金銭を得ることを第一の目的とする堕落した人物として描き出すことで、本作品を喜劇的要素で覆い隠す。第2幕で医師という職業について誇るサー・パトリックは、“you should thank Providence that you belong to a profession which is a high and great profession because its business is to heal and mend men and women.”「君は崇高で偉大な職業に属していることを神に感謝すべきだよ。それは男女を癒し治す職業だからね」とリジョンに語る[8]。それに対しリジョンは、“In short, as a member of a high and great profession, I'm to kill my patient.”「すなわち、崇高で偉大な職業の一員として、私は患者を殺すのですね」と皮肉めかして

返答するように、作中ショーによって医師たちの権威の虚偽性が暴かれていく[9]。例えばリジョンは、以前、ジェーン・マーシュという、腕に結核性の潰瘍ができた女性にツベルクリン注射をし、彼女の腕を腐らせてしまったことがある。サー・パトリックが彼にその話を持ち出したところ、リジョンは彼女の名前をすっかり忘れていたばかりでなく、彼女が医学の授業でその腐った腕を見せて生活費を稼いでいるとまで言ってのける[10]。また “I live in a state of siege ever since it got about that I'm a magician who can cure consumption with a drop of serum.”「私は血清一滴で肺結核を治療することのできる魔術師であるということが知れ渡って以来ずっと、人々に取り囲まれて暮らしてきた」とリジョンが述べるように、彼は新たな治療法を発見し結核を魔法のように治すことを可能にした[11]。しかしこの言葉からは、人々を医療という名の魔術で騙していることが、ともに示唆される。加えてウォルポールは、“nuciform suc” という架空の器官を切除する新たな治療を流行させることで金銭を得ることを目的とし、解剖に励むという医師として現れる。彼らは、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』(*Middlemarch*, 1871)に描かれる医師リドゲイトのような、向学心に満ちた医師とは正反対の、道徳的には腐敗した人々として提示される。こうした医師たちの姿を通して、ショーは本作品の悲劇的要素を、皮肉を伴う喜劇的な笑いで覆い隠す。

4.「悲劇」的なジレンマ

リジョンは劇中、旧友でもある「平凡で高潔な男」、すなわちブレンキンソップと、「天才である悪者」、すなわちルイスのどちらを救うべきかというジレンマに悩まされ続ける。ルイスは、リジョンにその芸術の才覚を称賛されるような人物である。“And theres no mistake about his being a genius. It's something to have got a case really worth saving. Somebody else will have to go; but at all events it will be easy to find a worse man”「ルイスが天才であることは間違いない。本当に救う価値がある患者を治療するのはよいことである。ほかの患者を治療するのをやめないといけないが、とにかく彼より価値のない人を見つけるのは簡単だ」[12]。一見「救う価値がある」人間のように提示されるルイスは、その一方で、医師たちと同様に道徳心のない人物として描かれる。そこで彼の命は救う意味があるのかというジレンマもまた提起されるのである。ルイスはジェニファーを着飾らせてやりたいという理由で、ウォルポールや B. B. に借金を申し込み、さらに貧しいブレンキンソップからも半クラウンを借りていることが判明する。また彼は、ミニーという正式な妻がいるにもかかわらず、ジェニファーとともに暮らしていることを医師たちに非難されても聞く耳をもたないというように、芸術的才能を示しながらも堕落した人物として描き出される。

自身をバーナード・ショーの弟子だと嘯くルイスの姿を通して、本作品の喜劇的要素はより一層強められるように見える。ルイスが臨終の場面を一種の「舞台」として考え、まるで役者のように「死」のシーンを演じようとする様子は、過剰なほどの演出に満ちており、むしろ笑いをもたらすようなものであることが読み取れる。サー・パトリックが、ルイスと会話するリジョンに、病人の神経に障るため出ていくよう忠告すると、ルイスは“Would you deprive the dying actor of his audience? ”「死にゆく俳優から観客を奪うおつもりですか」と尋ね、自身の死とそれを取り巻く観客を意識するかのようなセリフを発する[13]。彼がいよいよ臨終を迎えるという段階になると、新聞記者の登場により、彼の死は「悲劇」というには似つかわしくないほど最大限に戯画化される。この新聞記者は、“tubercle” を “cubicle” に、リジョンの名を “pigeon” に聞き違えるなど、臨終の場面を滑稽なものへと転じる役柄として現れる。そうした場面でルイスは、“I'm perfectly happy. I'm not in pain. I dont want to live.”「私は完璧に幸せだ。痛みなどはない。もう生きたくないんだ」と長大な演説をし、臨終を迎える[14]。登場人物たちの間には悲しみが広がるように見えるものの、新聞記者は相変わらず、B.B. に対して、“Do you think she would give me a few words on How It Feels to be a Widow? Rather a good title for an article, isnt it? ”「寡婦となってどのようなお気持ちですか、という質問に、ジェニファーさんは答えてくださると思いますかね。記事のタイトルにぴったりではないですか」と尋ねる[15]。その場に不釣り合いなセリフを発する新聞記者は、本来は喜劇的ではないはずのルイスの死の場面に、さらなる滑稽さを加えるのである。

さまざまな諷刺やカリカチュアを含んだ『医師のジレンマ』において、ルイスとブレンキンソップのどちらを救うべきかという「ジレンマ」は、前述したような喜劇的要素によって薄められ、一見すると、「悲劇」は表面的なものでしかないように見える。“I am a doctor: I have nothing to fear.”「私は医者だ。恐れるものは何もない」と豪語するリジョンは、自身の手腕を誇り、自分だけが患者の生死を掌握できると述べる[16]。ジェニファーは、夫を見殺しにしたリジョンを、“Dont you see that what is really dreadful is that to you living things have no souls.”「本当に恐ろしいことは、あなたにとって生き物は魂を持っていないことではないのですか」と詰る[17]。“The soul is an organ I have not come across in the course of my anatomical work.”「魂とは、解剖の途中で出会ったことのない臓器だ」という彼の返答は、あまりにも人間性に欠けており、皮肉な笑いを引き出すものとして機能している[18]。ここで、ルイスの後釜を狙いジェニファーの次の夫となることをもくろむリジョンの野望は、彼女の口から「私の夫」という言葉が出た瞬間、潰えることとなる。ジェニファーがすでに新たな夫を見つけていたことを知ったリジョンは、“Then I have committed a purely disinterested murder!”「それでは私は、まったく公平

な殺人を犯したというわけか！」と嘆息し、『医師のジレンマ』は完全なる喜劇として幕を閉じるように思われる[19]。

だが実際には、本作品にはいたるところに悲劇的な要素がちりばめられており、それは現実社会を取り巻く問題とも関連している。画家としての天賦の才を示す青年が、医師の恣意的な命の選択により妻を遺して亡くなってしまうというプロットを概観してみると、それは医療が発達しつつある20世紀初頭の世界において、悲劇的なものであるに違いない。本作品における「患者の命の選択」とそれに伴うジレンマというテーマもまた、医療倫理という観点から見ると、十分に悲劇的なものである。

さらに医師への皮肉の陰に、われわれはショーが患者の命の価値を医師が判断することへの嫌悪の表明を見出すことができる。第3幕においてB.B. は、“My weakness is that I have never been able to say No, even to the most thoroughly underserving people. Besides, I am bound to say that I dont think it is possible in medical practice to go into the question of the value of the lives we save”. [20]「私の弱点は、たとえ完全に価値のない人々にさえノーと言えないことであった。加えて私は、医療行為の中では、われわれが救う命の価値という問題に立ち入ることができないと言うべきである」と述べ、リジョンの考えに反感を示す。第5幕では、ジェニファーが “Doctors think they hold the keys of life and death; but it is not their will that is fulfilled. I dont believe you made any difference at all.”「お医者様方は生死の鍵を自分たちが握っていたとお考えのようですが、遂げられたのは先生方の意思ではありません。私はあなたが何か違いを生んだとは全く思っていません」と、医者たちが生殺与奪の権利を握っていると考えていることを批判する[21]。こうして、どちらの患者を救うべきか、というリジョンの「ジレンマ」は、それ自体が根本から否定されているのである。作中、サー・パトリックがリジョンに投げかける、“Well, Mr Savior of Lives: which is it to be? that honest decent man Blenkinsop, or that rotten blackguard of an artist, eh?”「それでは、命の救い主として、どちらがふさわしいのか？正直でまともなブレンキンソップか、それとも芸術家の卑劣なごろつきかね」[22]という質問の真髄は、2人のうちどちらに価値があるかということではなく、命の価値を問うことをそのものに対する批判にある。ショーが描こうとしたのは、そうしたジレンマを抱くことそのものが「悲劇」的であるということなのである。

5. 生体解剖の「ジレンマ」

さて、フィクションで描かれるこうしたジレンマを、現実社会に照らし合わせてみると、そこには1870年代から第一次世界大戦ごろまでのイギリスで盛んに起こった、動物の生体解剖の是非に関する論争が重なり合って見えてくる。生体解剖という問題は、動物

愛護の精神と医学上の必要性というジレンマと常に隣り合わせになっている。丹治愛は、生体解剖論争の論点となったのは、解剖そのものの「痛み」、そしてそれを「正当化できるのかどうか、どのような理由があれば正当化できるのか」ということであったと指摘する[23]。

18世紀から19世紀にかけて、「痛み」に対する大衆の態度や意識は変わっていった。アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームスは、1901～2年にエディンバラ大学で行われた講義において、18世紀には “strange moral transformation”「奇妙な道徳の変遷」が起こったと指摘する。

> We no longer think that we are called on to face physical pain with equanimity. It is not expected of a man that he should either endure it or inflict much of it, and to listen to the recital of cases of it makes our flesh creep morally as well as physically. The way in which our ancestors looked upon pain as an eternal ingredient of the world & order, and both caused and suffered it as a matter-of-course portion of their day's work, fills us with amazement. [24]
> われわれはもはや、身体的な痛みというものに等しく立ち向かうことを求められていないと考えている。人間は痛みに耐えるべきでも多くの痛みを与えるべきでもないと考えられている。痛みについての話を聞くことは、われわれの肉体を身体的にも道徳的にもぞっとさせる。われわれの先祖が、痛みを、世界と秩序の永続的な構成物と考えていたということ、日常の仕事の当然の成り行きとして痛みを引き起こし、それに耐えたということの両方に、われわれは非常に驚愕させられる。

近代以前の医療において、痛みとは治療に不可欠なプロセスであった。アニータ・グエッリーニは、生体解剖論争に関連し、前近代の世界では痛みは症状の一部と見なされていたので、痛みからの解放のみが唯一の治癒に伴うものだったが、1820年代にはモルヒネが痛みからの解放だけでなくほかの疾患にも利用され始めたことによって、19世紀には「痛みから解放されること」が、治療においてより重要になってきたと主張する[25]。こうした、痛みを悪いものとみなす動きは、人間だけではなく動物、とくに家畜にも適用されるようになり、1877年には、動物虐待をテーマとしたアンナ・シュウエル『黒馬物語』（*Black Beauty*）が著された。

『医師のジレンマ』序文において示されるとおり、ショー自身は生体解剖に関しては強固に反対の姿勢を見せている。その理由としてショーは、生体解剖論争における唯一の弱点は「痛み」などではなく、それを正当化する議論そのものであるということを指摘す

る。

A craze for cruelty can be developed just as a craze for drink can; and nobody who attempts to ignore cruelty as a possible factor in the attraction of vivisection and even of anti-vivisection, or in the credulity with which we accept its excuses, can be regarded as a scientific investigator of it. Those who accuse vivisectors of indulging the well-known passion of cruelty under the cloak of research are therefore putting forward a strictly scientific psychological hypothesis, which is also simple, human, obvious, and probable. [26]

残酷なことを求める熱狂は、アルコールを求める熱狂と同じように生じうる。生体解剖論、そして反生体解剖論の魅力にさえおいて、あるいはわれわれがその弁解を受け入れる軽率さにおいて、残酷さというものが積極的な要因であることを無視しようとする人々が、生体解剖の科学的な研究者として見なされることはないだろう。生体解剖論者が、研究という名のもとに残酷さという周知の情熱を甘受することを非難する人々は、それゆえ簡単で、人間的で、明白で、蓋然的な、断然に科学的で心理的な仮説を推進するのである。

生体解剖の是非に関して論じる際、それに賛成であろうとなかろうと、ショーは「残酷さ」という観点から判断することそのものを非難する。彼は、人間は誰しも、感情の根底には残酷さを求める性質があると主張する。ここで注目したいのは、ショーは、そういった観点から生体解剖論争に反対していたのではなく、そもそも動物の生体解剖は、どんな理由があっても許されざることだと考えていたということである。「残酷さ」とは、生体解剖論者にとっては、医療の発展のためには致し方ないものである一方で、反生体解剖論者にとっては、動物愛護の観点からは許されざるものであった。痛みや残酷さを論点にしてしまうと、両者間では一向に議論が進まない。「残酷さ」という視点から動物の生体解剖を論じることは馬鹿げていることであったのである[27]。

ショーにとって、実験動物に苦痛を与える解剖はおしなべて禁止されるべきであり、研究を大義名分としてそれを正当化しようとすることは、許されないのであった。医療技術の進歩と、それに比例して強くなる、動物へ与えられる苦痛という、生体解剖の「ジレンマ」に対して、ショーは「知識の習得」はありとあらゆる物事を正当化してしまう可能性があるということを指摘し、その正当化は最終的には“the most hideous conceivable enlargement of anarchy”「想像できる限り最もひどいアナキズムの拡大」にまでつながるとまで主張する[28]。当時の生体解剖論争に関して、ショーの序文からは、「痛み」とい

う観点から論じること自体に疑問を投げかける態度が伺えるのである。

ショーより10年ほど先んじて、小説家H. G. ウェルズも、動物の生体実験をテーマとした『モロー博士の島』（*The Island of Doctor Moreau*, 1896）を著した。作中、動物の身体を改造し知性を与えた「獣人」を作り出すモロー博士に対し、プレンディックは、動物実験の「正当性」という観点から、モローに次のように抗議する。

> 'But,' said I [Prendick], 'I still do not understand. Where is your justification for inflicting all this pain? The only thing that could excuse vivisection to me would be some application—'. . . . 'In my [Moreau's] view— in my view. For it is just this question of pain that parts us. So long as visible or audible pain turns you sick, so long as your own pains drive you, so long as pain underlies your propositions about sin, so long, I tell you, you are an animal, thinking a little less obscurely what an animal feels . This pain—'. . . .
>
> 'Oh! but it is such a little thing. A mind truly opened to what science has to what science has to teach must see that it is a little thing. . . . '[29]
>
> 「しかし、」私は言った。「私はまだ理解できません。こんな痛みを与えることを正当化する根拠はどこにあるのですか？ 生体解剖が許されるのは応用の場合のみのように思われますが—」
>
> 「確かに」と博士は言った。（中略）「私の考えでは、痛みという問題に関してわれわれは意見を異にしている。痛がるのを見たり聞いたりしたら、気分が悪くなるだろう。痛みを感じると君は心動かされ、罪の意識を感じるだろう。すなわち君は、動物の感じることを少しだけ曖昧でないよう考えることができるだけの動物なんだ。痛みとは—」（中略）
>
> 「ああ！だが痛みとは大したものではない。科学が教えなければならないものを本心から分かっているなら、痛みがちっぽけなものであると分かるに違いない」（後略）

プレンディックが、解剖が動物に与える痛みを自分のもののように感じ、動物実験に拒否反応を示す一方、モローはその痛みを問題とせず、科学の発展から見るとくだらないことであると切り捨てる。ここでプレンディックが生体解剖を行ってもいいと譲歩する「応用（application）」とは、医療の進歩という、人類の発展へ寄与する場合を意味していると考えられる。すなわち彼は、動物の生体解剖を行うことが、人間の役に立つならそれを受け入れると述べている。しかしながら、そうした条件を設定したとしても、その譲歩の範囲を設定することはきわめて難しいことだろう。

ウェルズが描く、こうした生体解剖の是非は、ショーが批判する生体解剖論争の論点にほかならない。ショーは、生体解剖の正当性を突き詰めていくことそれ自体を批判しており、『モロー博士の島』において痛みや正当化を論点とするウェルズとは異なる方向から反論する。ショーにとっては、その2つを天秤にかけることそのものが誤っているのである。『医者のジレンマ』本文では生体解剖について言及されない。しかしこのような医療における倫理に関して、ショーは「医療の発展のために動物に痛みを与えてもいいのか」という「ジレンマ」の存在そのものを否定しており、許容されるべきではないと考えていると推察される。

こうしたジレンマは、動物だけではなく、人間の身体という場においても見出すことができる。科学史研究者であるリチャード・バーネットは、ヨハン・フリードリッヒ・ディーフェンバッハというドイツの外科医の、医学上の功罪について次のように指摘する。

> ディーフェンバッハは全職業人生を通して、外見を損なう拘縮や斜視、顔面の傷などを外科的に修復する方法を探った。しかしその一方で、吃音を矯正する彼の極端な解決法は、患者におびただしい不必要な苦悩を負わせていた。(中略) 彼のフランスとイギリスの同僚たちが、患者の舌やアデノイド、ときには頭皮まで次々に切除する姿を見て、医学雑誌『ランセット』は「完全に手術熱に浮かされたマニアだ……こうした手術には、恐ろしい大出血、舌を失う大きなリスク、そして命そのものさえ失われる危険性があるというのに」と厳しく非難した。[30]

ディーフェンバッハの外科的治療は、患者の外見や機能上の問題点を改善するだけではなく、ひいては医学の進歩につながる可能性があると考えられる。しかしながら、それは患者に心身ともに苦痛を与え、命までも奪いかねないものであった。倫理的な観点から見ると、治療のためとはいえ、人命を犠牲にするということは果たして是認されるのであろうかということに対しては、さまざまな葛藤が生じるものである。ショーが『医師のジレンマ』において描いたのは、こうしたジレンマに対して否を突き付ける姿である。そのタイトルに反して、リジョンが抱くジレンマの存在そのものは当初より許容されていない。劇中では、「命の価値」の選択を医師が恣意的に行ってしまうことが悲劇的なのである。

ショーは本作品の序文において、少々誇張したたとえ話を用いて、人命を犠牲にする生体実験を以下のように批判する。

> When a man says to Society, 'May I torture my mother in pursuit of knowledge?' Society replies 'No.' If he pleads, 'What! Not even if I have a chance of finding out how to cure cancer by doing it?' Society still says, 'Not even then.' . . . . Just as even the stupidest people say, in effect, 'If you cannot attain to knowledge without burning your mother you must do without knowledge,' so the wisest people say, 'If you cannot attain to knowledge without torturing a dog, you must do without knowledge.' [31]
>
> ある男が社会に向かって、「知識の追求のために母親を拷問してもよいだろうか」と尋ねるとき、社会は「否」と答える。もし彼が「なんだって！たとえそうすることでがんを治す方法を見つけるチャンスがあったとしてもか」と嘆願しても、社会は依然として「その場合でもいけない」と言う。（中略）要するに、最も愚かな人々でさえ、「もしあなたのお母さんを焼かなければ知識を得られないなら、知識なしで済ますべきだ」と言うように、最も賢明な人々は「犬を苦しめることなしに知識を得られないなら、知識なしで済ますべきだ」と言うのである。

ショーは、知識を得るために自分の母親を拷問することがいかにばかげているかということを説くことで、医療の発展と命の犠牲というものを天秤にかけることの愚かしさを主張する。作中、サー・パトリックがリジョンに投げかける、「救世主として、どちらが救われるべきか」という質問の真髄は、2人のうちどちらに価値があるかということではなく、命の価値を問うことをそのものに対する批判として機能することにある。それゆえ生体解剖論争で論じられてきた「ジレンマ」は、ショーにとってそもそも愚かしいものなのである。

6. おわりに

喜劇の価値に関して、ショーは滑稽さのみがその真価ではないと、オスカー・ワイルド『真面目が肝心』（*The Importance of Being Earnest*, 1895）の劇評を通して述べる―― "It amused me, of course; but unless comedy touches me as well as me, it leaves me with a sense if having wasted my evening"「この芝居を見てもちろん楽しんだが、喜劇というものは楽しませると同じく、感動させなければ、時間を無駄にしたと言う感覚しか残さない」[32]。ショーは、リジョンら医師たちやルイスを道徳心の欠落した存在として描くことで、リジョンの抱く「ジレンマ」を諷刺し、「悲劇」という副題をもつ『医師のジレンマ』を、表面的には喜劇に仕立て上げている。ルイスの死後、速やかに再婚するジェニファーや、新聞記者の登場は、それをより一層強めるものとして機能する。だがショーが意図し

たのは、そうした笑いを通して、観客や読み手に現実社会における医療倫理という問題を提起することのように思われる。本作品のプロット、すなわち医師が2人の患者のどちらを救うかという選択を恣意的に行い、そのうち1人が妻を遺して死んでしまうという筋書きは、現実に置き換えてみると紛れもなく悲劇として捉えることが可能であろう。そこから見出せるのは、ショーが、生体解剖という現実社会の問題と舞台空間を接合させようと取り組む姿勢である。さまざまな喜劇的要素によって覆い隠された「悲劇」的な本作品は、命の価値を天秤にかけるという行為そのものを諷刺して提示しているのであり、そうした点で、リジョンが抱く「ジレンマ」それ自体が十分「悲劇」であるとして考えることができる。ショーは、医療が発達していきつつあった20世紀初頭の社会における「悲劇」として、本作品を提示するのである。

注

本稿は、2018年度日本バーナード・ショー協会秋季大会（2018年11月24日）における発表「*The Doctor's Dilemma* を通して見る医療倫理」に加筆修正を行ったものである。引用は拙訳による。

1. qtd. in Holroyd, Michael *The Guardian*, n.p. 13 July 2012. アーチャーのトリビューン紙（ロンドン）上の記事は、R. J. Cardullo によると、Archer, Williams. “About the Theatre: *The Doctor's Dilemma*.”（1906年12月29日号）である（Cardullo, R 64）。
2. *Ibid.*
3. Cardullo, Belt. “Whose Life Is It, Anyway? Shaw, *The Doctor's Dilemma* and Modern Tragedy.” *Shaw: The Annual of Bernard Shaw Studies*, Vol. 31, 2011, p.107.
4. 喜志哲雄『喜劇の手法　笑いのしくみを探る』集英社、2006, p.11.
5. Shaw, Bernard. *The Doctor's Dilemma: A Tragedy*. Penguin, 1957a, p.81.
6. MacCarthy, Desmond. “Notice.” Speaker, 1906, 226, *Shaw: The Critical Heritage*, Ed. T. F. Evans, Routledge and Kegan Paul, 1976, p.168.
7. ショーは『ウォレン夫人の職業』（*Mrs Wallen's Profession*, 1893）序文において、演劇の本質について、「劇は、ただの自然を映すカメラの仕組みではない。それは人間の意志と環境との間に生まれる対立、要するに問題の提示だ」と述べている（197）。ショーにとって、演劇の題材とはただ社会を映し出す自然主義的なものではなく、社会問題を取り上げるべきものとして考えられていたのである。
8. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.137
9. *Ibid.*

10. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.94.
11. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.99.
12. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.127.
13. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.173.
14. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.174
15. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.177
16. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.186.
17. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.183.
18. *Ibid*.
19. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.188.
20. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.154.
21. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.186.
22. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.135.
23. 丹治愛「『モロー博士の島』と生体解剖論争（10）」『英語青年』150（4）、2004、p.47.
24. James, Williams. *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*. anboco, 2016, p.p.297-8.
25. Guerrini, Anita. *Experimenting with Humans and Animals: From Galen to Animal Rights*. The Johns Hopkins UP, 2003, p.79.
26. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.46.
27. ジェイムス・ターナーは、ヴィクトリア朝時代の人々が前時代よりもいっそう「痛み」を感じることに恐怖を覚えることに触れながら、反生体解剖論者が「痛み」を論点に反対する理由について次のように述べる。

    動物実験は、痛みの観念がヴィクトリア時代人の心に呼び起こした不安と恐怖の主たる焦点になった。（中略）痛みの恐ろしさに敏感になったばかりの時代は、その不安を一つの明確な標的に集中して攻撃する必要があった。痛みを攻撃することによって、人は、自分が共犯ではないことを公表し、そのようなことを許している社会の一員としての罪を洗い流した。（中略）生体解剖反対はこのような止むに止まれぬ必要をまさに直接的に満たしてくれた。（154）

    痛みをより強く恐怖するようになったヴィクトリア朝の時代の人々にとって、生体解剖に反対することは、動物に痛みを与えるようなことをするような罪深い人間ではないと自らを擁護することと同等であった。
28. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p.57.
29. Wells, H. G. *The Island of Doctor Moreau*. Ed. Patrick Parrinder, Penguin, 2005, p.p.

73-4.

30. リチャード・バーネット『描かれた手術―19 世紀外科学の原理と実際およびその挿画』中里京子訳、河出書房新社、2017, p.p. 240-1.
31. *Shaw, 1957a, op.cit.*, p. 41.
32. Shaw, "An Old New Play and a New Old One." *Saturday Review*, 23 February 1895c, p.250.

参考文献

Cardullo, Belt. "Whose Life Is It, Anyway? Shaw, *The Doctor's Dilemma* and Modern Tragedy." *Shaw: The Annual of Bernard Shaw Studies*, Vol. 31, 2011, 102-117.

Cardullo, R. J. *Play Analytics: A Casebook on Modern Western Drama.* Sense Publishers, 2015.

Guerrini, Anita. *Experimenting with Humans and Animals: From Galen to Animal Rights*. The Johns Hopkins UP, 2003.

Holroyd, Michael. "Bernard Shaw and His Lethally Absurd Doctor's Dilemma." *The Guardian*, 13 July 2012. www.theguardian.com/stage/2012/jul/13/george-bernard-shaw-doctors-dilemma.

James, Williams. *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*. anboco, 2016.

MacCarthy, Desmond. "Notice." Speaker, 1906, 226, *Shaw: The Critical Heritage*, Ed. T. F. Evans, Routledge and Kegan Paul, 1976, 168-172.

Shaw, Bernard. *The Doctor's Dilemma: A Tragedy*. Penguin, 1957a.

---. Preface on Doctors. *The Doctor's Dilemma: A Tragedy*, by Bernard Shaw, Penguin, 1957b, 9-88.

---. "An Old New Play and a New Old One." *Saturday Review*, 23 February 1895c, 249-51.

Wells, H. G. *The Island of Doctor Moreau*. Ed. Patrick Parrinder, Penguin, 2005.

喜志哲雄『喜劇の手法　笑いのしくみを探る』集英社、2006。

ジェイムズ・ターナー『動物への配慮―ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』斎藤九一訳、法政大学出版局、1994。

丹治愛「『モロー博士の島』と生体解剖論争（10）」『英語青年』150（4）、2004、46-48。

リチャード・バーネット『描かれた手術―19 世紀外科学の原理と実際およびその挿画』中里京子訳、河出書房新社、2017。